

納品業務

高校生になった16歳の時、小型四輪の免許証を取得した。このころは満16歳になれば、小型四輪を受験できる資格があった。しかも大型バイクも乗れるという。今の若い世代にはうらやましく思われるだろう。

車がまだ珍しいころで、無免許でも運転が自由にできた時代だった。電力会社の下請けをしていた、いとこの会社の4ストトラックを中3のころから乗り回していた。ギアチェンジはダブルアクセルと言う技を使わないとシフトチェンジができない代物だった。

16歳の誕生日を迎えた6月に、姉が使った道路交通規則の教科書を読了し、600円の印紙を購入した出費だけで、一発で合格した。試験官は私の

伊藤製作所社長

伊藤 澄夫 14



入社直後、自宅前で

34歳までトラック運転手

運転技術をほめてくれた。運動神経の6回目ともなると、試験官が同情して鈍い父は6回目でやっと合格したこと合格させてくれるような時代だった。もあり、私の一発合格を感じていた。父の車が納入された日に、1週間以内

に車に傷をつけるかどうか、社員同士で賭けをしたが、博打の対象にしたことがバテて後日、大変怒られた。

入社後5年目のころから金型部門だけでなく、車の部品事業が順調に成長し、愛知県の顧客に納入するため、トヨタの2ストトラック、ダイナを購入した。車が大好きな私は納品を全て受け持った。若い社員も納品業務を希望したが、金型の技術をつけさせるためやらせなかった。また社長の息子だからトラックには乗らないと思われることは良くないと考えた。

それから34歳まで納品業務が続いた。真夏にクーラーがないことや、雨降りでもつらいことはなかったが、設立30年を超える会社の息子が、いつまでも運転手をしていることで、零細企業にみられることは悲しかった。

そのころ初めて運転手を採用した。その後、ライトバンで営業に出るようになり、「1日でこんなに多くの仕事ができるのか」と思った。ある日、親しい顧客の専務、材料問屋の社長とコーヒを飲みに行った時、私が「長いこと運転手をしていて……とつぶやいた。それを聞いた2人が「伊藤君、何を言っているのだ。おれたちは君の仕事ぶりを見ていて『あいつは大物になるぞ』と言っていたのだぞ」と言ってくれた。私がほめられたことより、会社が零細と思われていなかったことがうれしかった。